

中国バレエ前史

星野幸代

近代中国における西洋の思想、文学の受容については豊富な研究が重ねられている。昨今では、美術、音楽方面の研究もめざましい。白系ロシア人の大量亡命および、上海などの租界という特殊状況により発展したという点では、西洋音楽の受容とバレエの受容はリンクしてくる。

しかし、中国において今日バレエの技法、鑑賞などに関する参考書は少なくないが、中国における西洋バレエ自体はこれまで研究対象とならなかった。それには以下の理由が挙げられよう。文革後期に実質的な独裁をふるった江青が、革命バレエを推進する一方、バレエ団の演目やキャスティングに介入し、中国バレエ・ダンサー、指導者を弾圧した。従って、中国本国でバレエの受容と発展を研究することは政治的立場に関わるからである。また国外の研究者にとっても、中国バレエは文革時のメディア戦力として利用されたというイメージが強すぎ、中国バレエに文革のあだ花以上の意義が問われなかったのではなかろうか。¹

筆者は将来的には、19世紀末～建国前に中国が経験した様々な西洋文化衝撃の一環として、西洋バレエの受容を位置づけることを構想している。本稿は総論の第一歩として、1930-40年代、白系ロシア人により主として上海租界で急展開した中国におけるバレエ環境を概観し、並行して、後に中国バレエを先導することになる華僑のバレエ・ダンサーが海外で育っていくさまを各論の一つとして置きたい。具体的には、総論では、白系ロシア人ダンサーによって結成された上海バレエ・リュス（後述）の活動とその消滅までを概観する。各論では、建国前に中国に創作バレエをもたらし、建国後は中国初の国立バレエ学校、国立バレエ団で院長などを歴任した戴愛蓮（1916-2006）の前半生を跡づけたい。

1. 外国人ダンサーの中国への流入、バレエの受容

ハルビン

1934年9月、岩手県からハルビンに単身移住していた小牧正英（本名：菊池榮一、1911-2006）が、ハルビン音楽バレエ学校に入学を許された。

ハルビン音楽バレエ学校については目下調査中であるが、小牧正英によれば原則としてはロシア人しか入学を許されず、六年間カリキュラムで、バレエのレッスンのほかバ

レエ史、舞台美術、音響学、建築学などが組み込まれていた。² 小牧正英が師事したバレエ講師はキャトコフスカヤ・ワレスブナー。彼女はポーランド系ロシア人で、ワルシャワ国立バレエ団のプリマだったが、1917年革命後引退し教師になったという。³ バレエ学校の生徒は在学中にすでにモデルン劇場にエキストラとして出ることもあった。1939年8月、小牧28歳で同校を卒業した。卒業公演では『胡桃割り人形』のクライマックスである、金平糖の精とのパ・ド・ドウを踊った。⁴ ハルビンには、ロシア帝政時代の軍楽隊に発生する東支鉄道交響楽団、俗称ハルビン交響楽団があったから、⁵ バレエ学校卒業公演の音楽はその演奏によるものだったかもしれない。

卒業後間もなく小牧は一ヶ月間の教育召集令状を受け取り、応召する。召集を終えると上海バレエ・リュスからの招聘状が来たため、それに応じて上海へ移住した。

上海

エリアナ・パブロバ（1897-1941）は帝政ロシアの伯爵家出身で、マリインスキー劇場出身のダンサーに師事した後、エリアナ・パブロバ舞踊団を率いて巡業していたが、ロシア革命のために逃避行の末、1919年2月ハルピンから上海へ降り立った。⁶ この地で、同舞踊団の若手のナジェジダは、かつてマリインスキー劇場ソリストであったクリチェフスカヤ夫人のバレエ教室に通った。⁷ 夫人は、ライシャム劇場を発表会に使っていたという。続いて日本で1919~24年居留しながら巡業する。

1924年9月エリアナ・パブロバ舞踊団は上海のオリンピック劇場で『AZIADE』を公演した。ダンサーは21名であった。その後間もなくパブロバ舞踊団は神戸へ向かい、日本に定住して1928年鎌倉にエリアナ・パブロバ・バレエ・スタジオ開設。ウラジオストックで帝室舞踊学校由来のバレエ教育を受けた服部智恵子の助力を得て、⁸ 橘秋子、貝谷八百子ら日本のバレエ界を担う人々を輩出することになる。

1928年春、少女ベギー・フーカム（のちに芸名マーゴ・フォンテーン1919-1991）は、英国煙草会社上海支社に赴任した父を追って、横浜経由で上海に上陸した。⁹ まずは天津のロシア居留地内の社宅に移り、マダム・タラカノヴァ（不詳）というロシア人のバレエ教室に通ったが、1930年夏に上海に引っ越した。上海では外国からのバレエ団の公演を鑑賞するかたわら、ポリショイ学校で訓練を受けた白系ロシア人グレゴリー・ゴンチャロフ（1904-1954）にバレエを習う。ゴンチャロフは後にイギリスへ渡ってバレエ学校を開き、そこでは石聖芳（1936年上海生まれ）が学び、建国後の中国バレエをリードする一人となっている。¹⁰ 1933年、ベギー\マーゴは本格的にバレエを習うために英国へ帰った。三年後には、マーゴ・フォンテーンはバレエ・リュス出身のアリシア・マルコワ退団に代わり、ヴィック・ウェルズ・バレエ団（1956年ロイヤル・バレエ団と改称）のプリマとなる。

1940年、小牧正英が上海バレエ・リュスから招聘され、ハルピンから移住する。バレエ団メンバーの奔走によって混血エミгранト・ロシア人のパスポートを入手し、フランス租界に住んだ。¹¹

上海バレエ・リュスは1936年結成、ロシア帝室マリンスキー劇場およびディアギレフの組織した巡業バレエ団、すなわちバレエ・リュス^{補注1}のレパトリーを継承していくことを目的とし、白系ロシア人を中心に組織されたバレエ団であった。英国工部局の助成とフランス租界にある各銀行からの補助で公演を続けていた。当時、中国人も日本人も殆どバレエというものを理解せず、バレエ・リュスの上演を支持してきたのはバレエを理解する欧米人だった。¹² バレエ・マスターには、ニコライ・ミハイロヴィッチ・ソコルスキー（マリンスキー劇場出身）、男性第一舞踊手にはフェドス・シュビリユギン（マリンスキー劇場出身）、イ・エリロフ（ディアギレフ・バレエ団出身）、プリマにはヘレン・ボビナ（マリンスキー劇場出身）などがいた。稽古場はライシャム劇場の3階にあり、ドルだての給料だったという。¹³ ライシャム(Lyceum)・シアター(中国語では蘭心大戲院\西人戲院)の初代は木造で1872年焼失、二代目は1874年レンガで造られた。¹⁴ 小牧が職場としたのは、1931年に新築されたものである。

この劇場を中心に、上海バレエ・リュスは8年間で『白鳥の湖』『 Coppélia』『眠れる森の美女』など古典の定番から前衛的なものも含む約16種の主要なバレエを上演し、その他オペラの中のバレエ場面にも出演してきた。¹⁵

プリマの一人オードリ・キング(Audrey King)¹⁶ はロンドンのニコライ・レガット(1869-1937)舞踊学校およびチェケッテイ舞踊学校出身であった。ちなみに同レガット舞踊学校では1950年代に上述の石聖芳も学んでいる。¹⁷ キングは上海バレエ・リュスに出演する傍ら、フランス租界でオードリー・バレエ・スクールを組織していた。太平洋戦争によってキングが収容所に入れられた際は、小牧正英が継続した。戦後はキングが指導に戻ったが、1946年3月、彼女が英国へ引き上げるにあたりスクールは閉鎖された。¹⁸

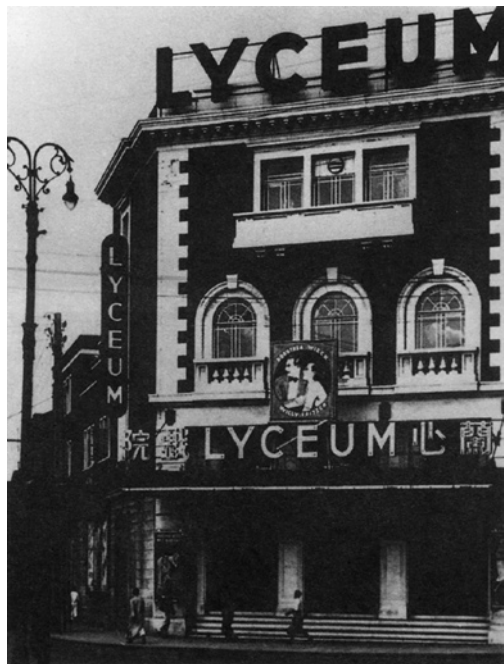


図1 ライシャム・シアター
 (『老上海』江蘇美術出版社 1998, p.198)

1940年5月には、チャイコフスキー生誕百年祭がライシヤム劇場で開かれた。その一環として、5月23-26日にはアレクサンダー・スルツキー指揮、上海工部局交響楽団演奏、上海バレエ・リュス公演で「白鳥の湖」全幕が上演された。¹⁹ オデット／オディールはオードリ・キング、王子はフェドス・シュビリュギン。小牧正英は第一幕パ・ド・トロワと第三幕のチャルダッシュに出演した。²⁰ すなわちソリストだったわけで、レベルの高い上海バレエ・リュスにおいても、小牧正英は当初から群舞より上位のダンサーとして通用したことが分かる。

1942年1月、連合国共同宣言の調印と、それに対する日独伊三国軍事協定をもって、日本は連合国との戦争状態に突入した。上海でも日本軍による軍事接收が始まり、連合国側の人々は家と財産を奪われ、収容所に収監された。これによって上海バレエ・リュスもオードリー・キングをはじめ何人かのダンサーを失い、公演活動も休止状態となったが、まもなく日本軍の管轄下で活動が再開された。上海バレエ・リュスが存続したのは、やはり唯一の日本人であった小牧正英の存在が大きかったらしい。²¹

英国工部局やフランス租界の銀行にかわって資金を援助したのが東和映画の川喜多長政、また原善一郎、草刈義人であったという。原善一郎は銀行家で、新交響楽団（現在のNHK交響楽団）のマネージャー的存在でもあった。草刈は上海音楽協会のアシスタント・マネージャーをつとめていた。²²

1943年3月より、上海バレエ・リュスは「大東亜共栄圏確立のための文化的使命を自覚し全面的に日本側の援助を得るために経済的困難を排し」、毎月一回定期公演をすることになった。²³ 第一回は1943年3月31、4月2、3日でライシヤム劇場で公演した。演目は「特に邦人や華人のために理解しやすい」『白鳥の湖』であったというから、一部であったにせよ中国人も入場可であった様子である。草刈義人が「現在のバレエ・リュスを育て日本の舞踊界を刺激しなければならない」と述べるよう、日本の文化のための国家援助であったにせよ、上海バレエ・リュスがいささか中国の芸術界を刺激した可能性は否定できないであろう。

1943年11月には、小牧正英はソコルスキー振付による「牧神の午後」主役を踊り、仏、英の新聞に絶賛されたという。²⁴ 同年、指揮者・朝比奈隆は1シーズン上海交響楽団の常任指揮者を務めた。その際、たくさんの外国人から「コマキ」というダンサーの評判を聞き、「白鳥の湖」「眠れる森の美女」などを鑑賞した。朝比奈は、「私達内地に居る日本人が少しも気がつかない間に、否、バレエ芸術というものが日本では全く未開の状態にとどまっていた間に、「コマキ」は少なくとも極東の文化人の間では大きな名前になっていたのだった」と証言している。²⁵

日本が敗戦すると、日本人は日僑収容所に集められたが、小牧正英はロシア人の友人宅に身を寄せることでそれをまぬかれていた。上海バレエ・リュスもついに解散となっ

た。小牧正英は「私はここで舞踊家として青春の情熱を燃やしたこと、芸術家として受けた待遇と誇りを、生涯忘れることはできないであろう」と述懐している。²⁶

ただ、小牧正英は約五年間上海に住んでいたにも関わらず、彼の上海バレエ・リュス時代の回想記には中国人の知人名が一人として登場しない。それは租界のバレエ界が、中国人をほとんど閉めだしていたことをものがたっている。

戦後になって小牧正英のバレエ人生がようやく中国と交わる。1945年9月、小牧正英は上海市立実験演劇学校（現在の上海戯劇学院）の講師に招聘される。小牧正英によれば、中国人「ミスター M」が「自分は上海実験演劇（戯劇）学校の校長である。貴君を講師に任命したいと思っているのだがどうであろう。私は戦前はフランスに留学していたが、このたび上海に戻ってこの学校の校長になったばかりだ」²⁷と勧誘したという。小牧正英はひとまず上海実験演劇学校の講師となったが、すでに上海に留まる意志を失くし、半年で辞職して1946年4月帰国の途についた。

2. 戴愛蓮と戦時のバレエ

戴愛蓮(Aileen・阮1916-2006)はトリニダード・トバゴに生まれ、三代続いた華僑であったため、英語を母語として育った。²⁸ 近所のバレエ教室に、西洋人に交じってただ一人の中国人として通い、基礎を確実に習った。

1930年14歳のとき、ロンドンへバレエを習いに渡り、アントン・ドーリン (Anton Dolin 1904-83、バレエ・リュス後期のスター) およびマリー・ランバート (Marie Rambert, 1888-1982、リトミック教育者としてバレエ・リュスに参加) に学ぶ。ランバート門下では、後の大振付家 F・アシュトン (1904-88)、A・チューダー (1909-87) と知り合い、チューダーとの交流は晩年まで続く。

次にマーガレット・クラスク (Margaret Craske, 1895-1990) のバレエ学校に入り、クラシック・バレエを学ぶ。クラスクは1920年代はバレエ・リュスのメンバーで、引退後ロンドンでチェケッティ (Cecchetti 1850-1928) のアシスタントをつとめ、チェケッティの死後はチェケッティ・メソッドに忠実な教師として指導に当たっていた。²⁹

1932年、戴はドヴォルザークの未完の歌劇「ハイアワサ」の群舞でステージデビューした。

このころ戴愛蓮はメアリー・ヴィグマン

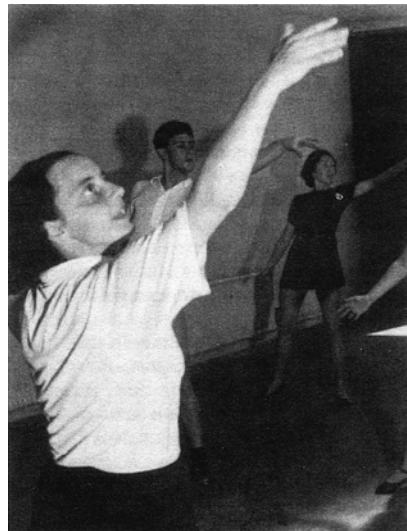


図2 リザ・ウルマン（手前）の指導をうける戴愛蓮（右端）（戴愛蓮 2003, p.48）

(Mary Wigman 1886-1973) の舞踊に衝撃を受け、ロンドンにおける、ヴィグマン舞踊団の団員によるモダンバレエ・ワークショップに参加する。

続いてクルト・ヨース振付の反戦バレエ「緑のテーブル」をやはりロンドンで見て感銘を受け、ヨースの関わるデヴォン州ダーティントン・カレッジ・オブ・アーツ開講の夏期セミナー選抜を受験し、受講を許可された。このときの講師には、ルドルフ・フォン・ラバン (Rudolf von Laban 1879-1947) の弟子のひとりリザ・ウルマン (?-1985) がいた。³⁰ 戴愛蓮はラバンの理論に強く共鳴し、のちに自ら振りつける際、ラバンの理論を用いている。

1939年、戴愛蓮は祖国で生活したいという強い希望から、英国留学から帰国する中国人学生たちとともに香港行きの船に乗り、1940年春に到着。すでに長姉が香港に結婚して住んでいた。まもなく、宋慶玲が戴愛蓮に抗日資金運動への協力を請う。

宋慶玲 (1906-1991) は日本軍の上海占領により、1937年上海フランス租界から香港へ活動の拠点を移し、保衛中国同盟を結成した。この同盟の主要任務は、国民党政府から物資を供給されていない、中共の軍隊に救援物資を提供することであった。³¹ 戴愛蓮は英国にいた間から抗日戦争の義捐金のために踊って



図3 1947年の戴愛蓮と葉浅予 (戴愛蓮 2003, p.83)

いたため、宋慶玲はその名を知っていたのである。宋慶玲の招聘で、戴愛蓮に抗日募金のため、抗日戦闘を反映した作品および「レ・シルフィード」より「ワルツ」等を公演した。公演パンフレットは、画家・葉浅予のイラストが飾った。

葉浅予 (1907-1994) は1930年代より連環漫画で名をはせ、1937年から漫画宣伝隊を結成して隊長を務め、漫画による抗日宣伝を行っていた。宋慶玲に戴愛蓮による義捐金公演のための宣伝係を依頼され、戴愛蓮の練習風景をスケッチし、ポスター、パンフレットを担当したのであった。³² 彼は戴愛蓮の1940年代の舞姿を数多く描き残すことになる。

これが縁となって戴愛蓮は葉浅予と結婚した。戴愛蓮24歳、葉浅予は33歳、彼にとっては三人目の妻であった。立会人は宋慶玲がつとめた。³³ 戴愛蓮は共産党の革命的事業に関わりたいと希望し、葉浅予とともに重慶へ向かった。途中、桂林の広西省立芸術館では欧陽予倩 (1889-1962) の計らいで広西の地方劇と舞踊を鑑賞する機会を持

ち、民族舞踊への興味を新たにした。広西省芸術館は欧陽予倩を館長として1940年に設置され、本格的な設備のある劇場であった。³⁴

重慶では、音楽家馬思聰と知り合い、彼のバイオリン曲『思郷曲』『新疆舞曲』をソロで振り付け、上演した。重慶で「レ・シルフィード」を踊ったこともあったが、受けが悪かったので、差し当たり本格的な西洋バレエは踊らないことにした。1941年、彼女は卵巣膿腫の手術のため、やむなく香港へ帰る。術後まもない同年12月、香港が陥落したため、彼女は葉浅予と命からがら桂林に逃げた。

1942年重慶にあった歌劇学校（未調査）舞踏クラスで教えたのが、中国における戴愛蓮の初めてのバレエ教学となった。続いて1944年、教育家・陶行知（1891-1946）が育才学校で舞踏組を教えてほしいと彼女を招聘する。育才学校は1939年陶行知を校長として発足した、戦災孤児から選抜した小中学生の学校で、音楽に作曲家・賀緑汀（1903-94）、演劇に劇監督・章泯（1906-75）文学に詩人・艾青（1910-）など錚々たる教員をそろえていた。³⁵

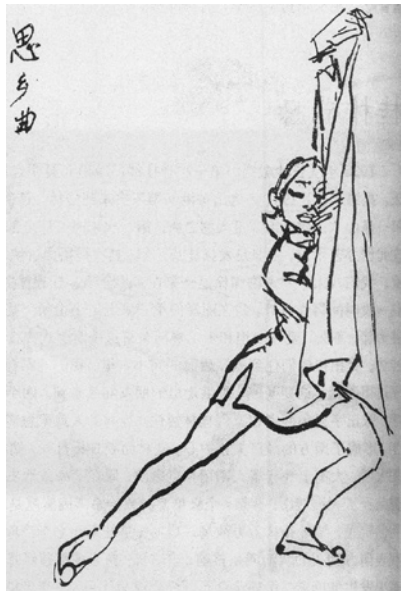


図4 『思郷曲』を踊る戴愛蓮（葉浅予2003, p.8）

1945-1946年にかけて戴愛蓮は、民族音楽を収集してその意義を研究する結社「山歌社」メンバーとの交流によって影響を受け、民族舞踊収集のためチベット、ウイグルを回り、民族舞踊家と親交を深め、振付を採集した。のちにそれらは彼女の創作舞踊に生かされることになる。1946年夏、戴愛蓮は、葉浅予が米国の軍司令の招きで戦地記者として招かれたため、サンフランシスコ、ニューヨークなどに滞在した。その際、一度公演したのは中国の民族舞踊であった。

1947年秋、米国から帰国した彼女は上海で主に民族舞踊を教えた。1948年2月、彼女は北京国立師範学院（現在の北京師範大学）体育学部（現在：体育与運動学院）で民族舞踊およびラバン系統のモダン・ダンスを教えるために赴任した。その際戴は、上海に残したクラシック・バレエの弟子たちを、上海バレエ・リュスの残党ソコルスキー夫婦に託した。建国後1954年、彼女は中国初の国立バレエ学校、北京舞踊学院の院長となる。

戴愛蓮は幼時より英国領でクラシック・バレエを学び、続いてロンドンで、アンナ・パブロワやニジンスキーも学んだディアギレフ・バレエ・リュスの指導者チェケッティ

のメソッドによって基礎を築いた上で、ルドルフ・ラバン、メアリー・ヴィグマン、クルト・ヨースらに由来するモダン・ダンスを正統なルートで学んだ。さらに彼女は本人の欲求と、山歌社の影響によって中国少数民族の舞踊を収集し、それは抗日のための公演と舞踊教育の間を縫うように行われた。従って、彼女はクラシック・バレエ、モダン・バレエの両方をマスターし、民族舞踊にも造詣が深く、しかも革命に共鳴し教育の実践に献身するという、建国前後の中国の舞踊普及をリードするための条件を、すべて備えた人材となっていた。

結び

以上、上海バレエ・リュスの活動とその周辺を概観し、戴愛蓮のバレエ修行時代から、中国バレエの本格的育成に着手するまでを追った。租界におけるバレエを中国バレエ史にいかに関与させたか、また白系ロシア人の大量流入がある前に中国でのバレエ受容はあったのか、など大きな課題が残っている。しかし、西洋バレエの受容が、西洋音楽の受容とは並行している部分があり、「国統区」における戯劇活動、美術活動、また平民教育、近代的教育ともリンクしてくるが見えてきた。今後、上記その他の様々な課題を段階的に解決していくことにしたい。

注

- 1 藤井省三はこの状況を次のように総括する。「一人の作家と八つの模範劇」と称されるように、現実の農村から乖離した農村を描いた小説家浩然と、毛沢東夫人江青の指導を受けた五つの現代京劇、「白毛女」など二つの革命バレエ、交響曲一曲を除いて一切の文芸活動が圧殺された」（藤井省三 1991、27-28 頁）。なお、江青のバレエへの介入については「中国国立バレエ団の半世紀」（『ダンスマガジン』2005 年 9 月号）による。
- 2 山川三太 p79。
- 3 小牧正英 1984、p139、山川三太 p79、草刈義人（下）。
- 4 山川三太 p100。
- 5 この交響楽団の経緯は、岩野裕一著の第一～三章に詳しい。
- 6 エリアナ・パヴロバについては、川島京子 2005、2006 による。
- 7 村松道弥『私の舞踊史 上』テス出版 1985、p.127。大野芳 1999 はコルチョスカヤと表記。クラウディア・クリチェーフスカヤ (Klavdia Kulichevskaya, 1861-1923) はヨハンソンヤプティパに学び、マリインスキー劇場でクラシックな役をこなすソリストとして活躍した。引退後、教師として迎えられる。1916 年まで教職。スペイン舞踊家の川上鈴子 (1903-1988) も、1920 年代上海でクリチェーフスカヤにバレエを習ったという。
- 8 服部智恵子 1990、pp.198-200。
- 9 マーゴ・フォンテーンの少女時代に関する記述は、すべてフォンテーン 1983 による。
- 10 石聖芳 2004、p232。

- 11 山川三太 p104。
- 12 小牧正英 1984 p29-30、草刈義人 1943 年（下）。
- 13 山川三太 p117。
- 14 榎本泰子 2006、p.18-20、p.182。
- 15 草刈義人（上）によれば 1943 年までの上海バレエ・リュス上演作品は次の通り（〈〉内は現在の通称）。
- 「一九三六年『コッペリア』△一九三七年『イーゴル公<イーゴリ公>』韃靼の踊△一九三八年『眠れる森の美女』『ドンキ・ホーテ<ドン・キホーテ>』『白鳥の湖』△一九三九年『金鶏』『四季』『エスメラルダ』△一九四〇年『アルミーデの亭』『シヘラザーデ<シェーラザード>』『カニヨークゴブノク<せむしの子馬>』△一九四一年『胡桃割<くるみ割り人形>』『海賊』『レイモンダ<ライモンダ>』『前兆』『チャイコフスキー第五交響曲』『カルナバル』△『カプソチオエスパニョール<カプリチオーソ・エスパニョール>』『第四交響楽』チャイコフスキー作曲
- このうち殆どがロシアのバレエであり、『カプソチオエスパニョール (Capriccio Espagnol)』はバレエ・リュスの振付家であったレオニード・マシーンが振付、バレエ・リュス・ド・モンテカルロが 1939 年 5 月初演したばかりであった。バレエ・リュスの系譜を受け継ごうという上海バレエ・リュスの意気込みがうかがえよう。
- 16 オードリ・キングは、戦後は南アフリカでヨハネスブルグ・ユース・バレエ団を設立している。（同バレエ団公式ホームページ http://www.joburg.org.za/2006/june21_youthbalett.stm）
- 17 石聖芳 2004、p.231。
- 18 山川三太 p117、草刈義人（中）
- 19 榎本泰子 p201-203、山川三太 p118。
- 20 草刈義人 1943 年（上）
- 21 草刈義人（上）は「上海は新しい秩序の下に更生しそれに伴った社会及び経済界の変動はバレエ・リュスの人々をも圏外にはおかないで公演の見込はなくなり昨年の六・七月頃には解散同様の状態になった。けれどもやがてバレエ・リュスに思ひかけない変化が起こった。それは日本の生んだ本格的な古典舞踊家小牧正英氏の来滬であった。…（星野略）…約三年前に上海バレエ・リュスは氏を第一舞踊手として招聘したのであった。しかしその時は実現を見ず昨年の八月に全く突然に来滬されそのころ解散同様のバレエ・リュスを再組織し自ら指導者とな」った、と述べる。小牧が上海バレエ・リュスに来た時期を草刈は 1942 年 8 月と認識し、小牧正英自身は 1940 年 4 月とする。これは、小牧が大東亜戦争勃発まで芸名レオ・ドノオーレで出演していた（山川三太 p122）ためであろうか。
- 22 小牧正英 1977、p.27、榎本泰子 p.225 および草刈義人（中）。
- 23 草刈義人（下）。
- 24 小牧正英 1977、p.30。
- 25 朝比奈隆・小石忠男 1978 pp40-41、p.354、および朝比奈隆「小牧君・上海・私」『コッペリア』プログラム 1948、小牧正英 pp83-86 に転載。
- 26 小牧正英 1984、p.48。
- 27 小牧正英 pp98-99。
- 上海市立実験演劇学校の初代院長は熊仏西であり、李健吾、顧仲彝、黄佐臨らとともに創設した。熊仏西はアメリカのコロンビア大学に留学しているから、「ミスター M」の経歴に合わない。

李健吾ならば1931-31年フランスに留学している。「ミスターL」との聞き違いであろうか。

28 以降、戴愛蓮に関する伝記的事項は、特に注記しない場合は戴愛蓮2003による。

29 Craske, 1980。

30 ルドルフ・ラバンはドイツモダン舞踊の父。1938年3月ナチの迫害をさけて英国に亡命、ラバンセンターを設立。1954年ラバン運動の芸術研究所設立。

リザ・ウルマン (?-1985) マンチェスターにラバンの援助で運動の芸術研究所を設立した。
(ラバン1985 第二版序および訳者あとがき)

31 エブシュタイン 1995、pp3-5。

32 葉浅予 p.251

33 葉浅予 p.384。

34 阪口直樹 1998、p.49。

35 齊藤秋男 1961、p192。

補注1 本稿のディアギレフ・バレエ・リュス (Ballets Russes) に関する記述は、バックル1984およびGarafola 1998による。

引用文献

朝比奈隆・小石忠男『朝比奈隆 音楽談義』芸術現代社 1978

岩野裕一『王道楽土の交響楽 満州—知られざる音楽史』音楽之友社 1999

榎本泰子『上海オーケストラ物語 西洋人音楽家たちの夢』春秋社 2006

エブシュタイン、イスラエル『宋慶玲 中国の良心・その全生涯 (上) (下)』久保田博子訳、サイマル出版会、(上) 1993、(下) 1995

川島京子「エリアナ・パヴロバによる日本へのバレエ移植—居留地時代 (1919-1924) に着目して—」『舞踊学』28号、舞踊学会 2005

「エリアナ・パヴロバによる日本へのバレエ移植—日本に現存する資料から得られる来日前の芸歴—」『演劇研究センター紀要』VI、早稲田大学演劇研究センター2006

大野芳『瀕死の白鳥 亡命者エリアナ・パヴロバの生涯』新潮社 1999

大野芳『近衛秀麿 日本のオーケストラをつくった男』講談社 2006

草刈義人「舞踊の春 上海バレエ・リュスへの期待 (上) (中) (下)」1943 (昭和18) 年4月1日、3日、5日

小牧正英『バレエと私の戦後史』毎日新聞社 1977

『晴れた空に……舞踊家の汗の中から』未来社 1984

呉亮著『老上海』江蘇美術出版社 1998

齊藤昭雄「解説」『民族解放の教育』陶行知著、齊藤秋男訳、明治図書 1961

阪口直樹「『国統区』文化活動における「西南劇展」の位置」『言語文化』1-1 同志社大学言語文化学会、1998

石聖芳「石聖芳と芭蕾」林克昌『黄土地上的贝多芬』時報出版社 2004

戴愛蓮『我的藝術与生活\戴愛蓮口述』人民音楽出版社 2003

ダンスマガジン編『日本バレエ史 スターが語る私の歩んだ道』新書館 2001

- 服部智恵子『『服部ママ』口伝 バレエ花伝書』エー・アイ 1990
- バックル、リチャード『ディアギレフ ロシア・バレエ団とその時代』上・下、鈴木晶訳、リプロ
ポート 1984
- フォンテーヌ、マーゴ『マーゴ・フォンテーヌ自伝』湯河京子訳、文化出版局 1983
- 藤井省三『中国文学この百年』新潮社 1991
- 山川三太『「白鳥の湖」伝説 小牧正英とバレエの時代』無明社 1995
- 葉浅予『葉浅予自伝 細叙滄桑記流年』中国社会科学出版社 2006
- ラバン、ルドルフ『身体運動の習得』神沢和夫訳、白水社 1985
- Craske, M. *The Dance of Love*. Sheriar Foundation, 1980
- Garafola, L. *Diaghilev's Ballets Russes*. Oxford University Press, 1989